

山鹿素行の教育論形成過程と学校・教師・教育方法・教育課程論

——『修教要録』から『謫居童問』への展開——

内山 宗 昭

(序)

山鹿素行（一六二二年～一六八五年）の教育論の形成過程に関して、明暦二年（一六五六年）の素行の著作『修教要録』の教育説と素行の当期の捉え方を中心に拙論で考察を行ってきた¹。素行のその後の教育論への展開の基盤としての観点から『修教要録』の教育説を分析し、また『修教要録』から『武教小学』、そして『山鹿語類』さらに『謫居童問』への展開の経緯を辿ることで、素行の教育論の形成過程を考察してきたが、なお、その詳細の検討を行いたい。

『修教要録』の陶冶性論としての人間形成の基礎論、そして制度や方法に言及する学校論、教師論、学習論から始まり、子どもとそ
の教育の在り方を意図的に取り上げた記述である「力行三外編一」
篇「胎教・子を生む・子を教ふ・通じて子弟を教ふ」という素行の
子どもを対象とする教育方法論は特に、その後の素行の古学期で展
開される子どもの発達を考量した特徴ある方法論に連接している。

家庭教育論とそれに続く学校教育論を位置付け、教育方法の一環として教育課程論を取り上げている。その中で特に「胎教」論からの展開について考察したが、ここでは、学校論と教師論、教育方法論一般の問題に関する素行の見解、教育課程論の展開の経緯を中心に
取り上げ、その位置付け、特色を辿り、形成過程の全体を検討しておきたい。

(一) 『修教要録』における家庭教育論と学校論

『修教要録』「子を教ふ」の項の前後に展開される教育説は、「胎教」から始まる家庭教育論として位置付けられるとともに、学校教育論へと連接している。それは教育課程論にも内在していた。生涯にわたる学習の観点と、その過程で後継者を如何に育成するかという論点を加えて総合的な教育説の集成としての体裁となっているのは、古典説を基盤として、特に丘濬の『大学衍義補』の教育的意図の影響

響とみなされる²。従って「子を教ふ」の項に学校の記述が含まれ、「通じて子弟を教ふ」の総括の項にも学校論が含まれる。そして、ここでの学校教育論の取り上げ方は、教化政策の観点で書かれた箇所とは異なり、子どもの成育の観点からの、家庭教育以降の、あるいはそれに並行した学校教育としての位置・構成になっている。これは『修教要録』の記述の特徴ともいえ、同時期の『治教要録』（明暦二年・一六五六年）の関心は、教化論としての学校教育であることは明らかであることを考えると、『修教要録』では、その点において未分化であり連続した記述になっている点がある。続く「通じて子弟を教ふ」の項の構成も家庭教育後の学校の必要、学校における教育方法、家庭と学校の両者の意義としてみるができる。その意味での『修教要録』のこの項における古典説の引用と、その学校論・教師論・教育方法論と、素行の意図を考察しておきたい。

その文脈に照らすと、『修教要録』「子を教ふ」では、確かに「礼記」「内則」の幼児からの教育方法への関心が中心になっていたといえる。一方、「通じて子弟を教ふ」の項の冒頭からは古典の学校説を列記している。「学制に曰はく、古の王者国を建て民に君たる、教学を先と為す。故に舜は契に命じて、……司徒と作り、敬んで五教を敷くこと……」³から始められている。古学期の『山鹿語類』（寛文五年・一六六五年）「父子道」篇では専ら家庭教育の観点からの論に限定され、学校論は「学校を設け道学を立つ」篇として切り分けている。「父子道」篇「教戒に節あり」の記述で、「本朝には十五已上は、……成人の禮を以てする也。……人既に成人の礼あるの後

は、師に随ひ友について学習するの道あれば、さして父母の教戒にのみかかるべきに非ざる也⁴。」とあるように、家庭教育の後に学校教育が続けられ、また別途必要であることの趣旨の記述がみられるに留まる。その点、「すべて幼児の教戒、其の節天の時を考へ」と続く記述から考えれば、発達期と認識される時期とは区別されていることがわかる。しかも素行は、日本に於いての適用として、これを意識的に論じている。

そして『山鹿語類』では「八歳は小学に入るの歳にして⁵」と述べられていた。学校への入学年、学齢の問題について、『山鹿語類』「教戒に節あり」では、冒頭「内則」を引き「十年出就外傳」を記すとともに、「王制に、小学の教、公卿大夫の子十有三にして始めて入小学」と「又は八歳にして小学に入り、十五にして大学に入る」を引いている。そして「是れ各々古人子弟に教ふるの節にして、或は家に教へ或は学校に入らしむるに及んで、其の年数に差別あるのみ也。」⁶としていて古例を多々示すのみで、結論として前述の「本朝には十五已上は、……成人の禮を以てする也。」と十五歳以上を示唆している。一方で八歳とし、一方で十五歳とするのは、当期の日本の実情に照らして学校如何という問題が背景にある。素行は古典説を取り上げ敷衍しながら説述しており、述べた後で「是れ異朝の礼節也。」と補足をしているのである⁸。素行にとつての「小学」とは実質いかなるものかということである。こうした古典説との混在と、実質的な素行の日本の実情に照らした学校の代替論の提供は素行の学校論そして教育方法論に内在するものである。古学期にあつ

て、古典引用の混在と、そこから自説を現実案として述べようとす
る展開がみられる。逆にみれば、古典説典拠は古学期にも継承して
いたといえる。

その後の『謫居童問』（寛文八年・一六六八年）では、「七八歳に
なれる時は、齒初めてかはりそむべし。これ金の全くなれる相也。
……金全き時は水すであつまりて成人のはじめたるを以て、男子
は外に居處をまうけて男女の別を定め、師をえらびてこれにつかへ
しめ⁹」とされている。

明暦二年（一六五六年）に遡れば、『修教要録』の約半年後に書
かれた『武教小学』では「言語已に通ずるときは、即ち師を選び友
を考へて人品の下に到らしむること勿れ。師弟の相接はるは、尤も
敬恭すべし¹⁰」とのみあり、『武教本論』では、「学校選挙の法」に
関する教化政策の観点に終始する¹¹。

そして、起点であるところの『修教要録』「通じて子弟を教ふ」
では、例えば繰り返し引用されるところの「王制」の「小学は公宮
の南の左に在り、大学は郊に在り。公卿の太子、大夫元士の適子を
して十有三にして始めて小学に入り¹²」の記述を引いていた。以下、
学校設置関係の引用が続くが、既述の文脈からいえば、ここでは制
度設置としての記述でありながら、その中の子ども・青年への教育
という観点から載せていると考えたい。すなわち、代表的な古例で
ある「学記」の「塾・庠・序・学」の学校も、続く「周禮、師氏は
……国の子弟に教ふ。凡そ國の貴遊子弟学ぶ。師氏は三徳を以て国
子を教ふることを掌る。一に曰はく、至徳以て道の本と為す。二に

曰はく、敏徳以て行の本と為す。三に曰はく、孝徳以て逆悪を知る。
三行を教ふ。一に曰はく、孝行以て父母を親しむ。二に曰はく、友
行以て賢良を尊ぶ。三に曰はく、順行以て師長に事ふ¹³」は、ここ
では子弟への教育方法としての観点からの引用であることが看取さ
れる。以下、「保氏は國子を養ふに道を以てすることを掌る。乃ち
之れに六藝（五禮・六樂・五射・五馭・六書・九數）を教ふ。乃ち
之れに六儀（祭祀・賓客・朝廷・喪紀・軍旅・車馬、各々の容）を
教ふ。大司楽は楽徳を以て國子に教ふ、中和・祇庸・孝友なり。楽
語を以て國子に教ふ、興道・諷誦・言語なり。楽舞を以て教ふ、雲
門・大卷・大咸・大磬・大夏・大濩・大武なり。其の淫聲・過聲・
凶聲・慢聲を禁ず¹⁴」は、古例でも規範的な位置にあつて『山鹿語類』
の学校論でも取り上げられているが、ここでは教育内容の面から特
に取り上げられているとみなすことが可能である。「六芸」の意義
を確認しているものといえ、素行学校論の趣旨に照らして重要では
ある。こうした教育内容を意識した引用は、学齢の問題が関係して
きたように、生涯の中での随年教法として、すなわち年齢に即して
何を学び、その時の教育内容は如何という教育課程観に強く関連す
る記述として表れている。例えば、次も学校説の引用としては典型
ではあるが、その中でこの教育課程の観点が看取されることは注意
される。

古者八歳にして小学に入り、十五にして大学に入る、其の才の
教ふべき者を擇びて之れを聚む。不肖者は之れを農畝に復す。蓋
し士農は業を易へず。既に学に入るときは農を治めず、然して後

士農判る。古の士は十五より学に入り四十に至りて方に仕ふ。中間自ら二十五年の学あり、又利の趨くべきものなければ志す所知るべし。須らく善に趨き去り此れより徳を成すべし。後の人童穉の間より已に汲々として利に趨るの意あり。何に由りてか善に向ふことを得ん。故に古の人は必ず四十にして仕へしむ、然して後に志定まる。只だ衣食を営むは却つて害なきも、惟だ利祿の誘最も人を害す。¹⁵

選拔的に教育を行う制度と結び付ける説を採っており、これは『武教本論』に於いても確認されたが、ここで学校は職業・社会と距離のある教育専門の空間として認められている。しかも、生涯における教育課程論に相応して、十五歳より入学し四十歳に至るまで、二十五年間の学修があるとされる。これを理想とし、対比的に「童穉の間より已に汲々として利」を考える傾向にある学修に批判的な言辞と読み取ることが出来る。それほど、純然たる教学の聖域性が強調された説といえる。「日用の学」の重視を説く素行は、こうした聖域性は、そのまま肯定しえないはずだが、この時点でもその「衣食を営む」ことは肯定し、「利」の誘惑を否定している本説の趣旨に同意していると思われる。

さてしかし、こうした一般的には制度論に軸のある引用説の多くは、『山鹿語類』では分化するのであり、「治教」の問題、すなわち教化政策の領域に移行しているといえる。

学齢の問題、そして学校教育と家庭教育との関係を整理すると、素行は、『修教要録』の段階では、教化政策の観点に立つ学校論へ

の関心の他に、「齊家」すなわち家庭教育の観点から、それに連接をする学校教育の意義を認める関心が併行してあった。ある点で両者は分化されていなかったといえる。しかし、『武教小学』以降の著作では、日本での適用を意識して日本の当期の学校普及が至らない実情を勘案し、『謫居童問』にあっても、「古の書に委しといへども、先ず小学・大学の教を本として、其の已後一生の学は只だ日用の間知を明にいたして、邪正明白に惑はしめざるまでのこと也。」¹⁶とし、古典に則り学校の意義の重要性を説き、主に私塾での学問を限定的に想定はしつつも、全てにその機会はないことを認め、むしろ「日用の学」を実践することを説いているといえる。

(二) 教師と教育方法論

『修教要録』「通じて子弟を教ふ」は、そのように学校設置の説から始めて学校教育に言及した上で、それに関連して以下のような教師と学習者間の主題が取り上げられてくる。教師論と学習論も別の項でも論じられていたが、¹⁷ここには子弟を教える仕組みとしての学校と、そしてその場合の教育の方法とは何かについての説を扱うという構成の意図が看取される。その視点で集約的に教師と教育方法の問題に進んでいると解釈できる。しかし、その書き方は、教育場面での学習者側の教師に対する態度・規範に関する指摘が多い。

『礼記』「曲禮」より、「先生に従ふときは、路を越えて人と言はず。先生に道に遭ふときは、趨りて進み、正しく立ちて手を拱す。先生

之れと言ふときは對ふ。之れと言はざれば趨りて退く。」¹⁸を引いている。これは目上の者への礼法であるとともに、注釈として、学び手としての師への敬意と配慮、教えを授けられるための即応・準備に触れていることも含め、教師に対する学び手側のあるべき規範という趣旨で取り上げられるものである。同様、「曲禮」より、「先生の書策琴瑟前に在れば、坐いて之を遷す、戒めて越ゆる勿れ。坐するときは必ず安にして爾の顔を執れ。」¹⁹を挙げ、所作において静を守れとし、「長者及ばざるに僂言すること毋れ。」と、学習者は教師と対等の言をとつてはならないとし、教師の言を待たずして発言することも許されないとする。「爾の容を正しうして、聴くこと必ず恭しく、勸説すること僻れ。」とする。「勸説」とは他人の説を自説として発表することであり、それを認めない。「雷同すること毋れ。必ず古昔を則り、先王を稱せよ。」と古典の尊重とそれを順守する方針を示し、「先生に侍坐するに、先生問ふこと終れば則ち對ふ。」として、あえて教師の発言の邪魔をしないことを説く。師を尊び道を重んずるがゆえに「業を請ふときは起ち、益を請ふときは起つ。」のであり、「先生召すときは諾することなくして、唯して起つ。」という一連の教師に対する弟子の礼法があげられた一節を採っている。²⁰

これに関して、『修教要録』に続けて同年中に書かれた『武教小学』「子孫教戒」で同様の趣旨を述べる箇所としては、前述の「言語已に通ずるときは、即ち師を選び友を考へて人品の下に到らしむること勿れ。師弟の相接はるは、尤も敬恭すべし。兵書武冊は汚れ

たる席に置くべからず。盥ひ漱ぎて之を披き、師を貴ぶこと父兄の如くす。」²¹と、明確に日本の武士の子弟を対象化して変容しているが、敬恭や威儀をもつて教師や書物に対することを強調している。この翻案ぶりからすれば、礼法の古典は参考例であり、額面通りに形式を踏襲するという意味ではなく、その意義のみを倣えとする素行の意図が既に窺われるところである。同箇所「倣俗を忘れて漢の様を欲す」ことを戒めている。²²

『修教要録』での「幼子には常に証すなきことを視すと……立つときは必ず方を正し傾き聴かず。」の言は、「子を教ふ」においても「曲禮」自体ならびに、それを引用した劉彝の言説として強調された。²³それは『武教小学』においても「少事と雖も詐偽りを以てせず」という教育方法の背景に意識されている。²⁴

『武教小学』のこの「人品の下に到らしむること勿れ」のところでは、邵康節の陶冶性論が示されている。これは『修教要録』「通じて子弟を教ふ」では総括の後半に示されていた。

邵堯夫、子孫を戒めて曰はく、上品の人は教へずして善し、中品の人は教へて而して後に善し、下品の人は教ふるも亦善からず。教へずして善きは聖に非ずして何ぞ、教へて後に善きは賢に非ずして何ぞ、教へても亦善からざるは愚に非ずして何ぞ。²⁴

『小学』にも記される代表的な陶冶性説であり、陶冶性の評価を基礎にして、教育・学習の意義を強調し、それに教育方法論を位置付ける事由からであるが、この構造は、従って『修教要録』では少なくとも形式的には直接接続していないが、『武教小学』に至って、

より直接的な文脈として構成されていることが看取されるのである。

そして『修教要録』では本節の文脈に、

陳忠肅公曰はく、幼学の士は先づ人品の上下を分別せんことを要す。何者か是れ聖賢の爲す所の事、何者か是れ下愚の爲す所の事と。善に向ひ惡に背き、彼れを去りて此れを取るは、是れ幼学の當に先にすべき所なり。顔子・孟子は聖賢たり。之れを学べば未だ至らずと雖も亦賢人たるべし。今の学者若し能く之れを知らば、則ち顔孟の事我れも亦学べし。……若し夫れ志を立つること高からざるときは、其の学皆常人の事なり。語りて顔孟に及ぶときは、敢へて當らざるなり。其の心に必ず曰はん、我れは孩童たり、豈敢へて顔孟を学ばんやと。此の人には以て上を語るべからず。先生長者は其の卑下なるを見て、豈肯へて之れと語らんや。先生長者肯へて之れと語らざるときは、其の與に語る所は皆下等の人なり。²⁵

との引用を置いていることも注意される。素行が後年に展開する陶冶性を最大限評価しようとする「中人」説と比較して、むしろ教育における資質・能力別の方法を考量せよとの主張が併置して置かれており、邵康節説もそちらの文脈で読めることも窺える。

さて、引用古典説の説述では、教師に対する学習者の問題は、学習者側からの心得として記述されることが多いのが特徴である。しかし逆にそれを「通じて子弟を教ふ」の観点からすれば、教師の在り方として捉え直すことも十分可能である。各説の論者もそれを含んで記述しており、素行もまたそのような受け取り方をしている。

その点で、弟子の在り方に関する古典の引用と解釈にあつて、「孔子曰、弟子入則孝、出則弟、謹而信、汎愛衆而親仁、行有餘力則以学文。朱子曰はく、謹とは、行の常あることなり。信とは言の実あることなり。……餘力は猶ほ暇日と言はんがごとし。……文は詩書六藝の文を謂ふ。程子曰はく、弟子たるの職、力餘りあるときは文を尊ぶ。其の職を修めずして文を先にするは、己れの爲にするの学に非らざるなり。」²⁷とある場合も、弟子の心得としての「行の常」としての生活としての学びと職を学ぶこと、そして閑暇に「詩書六藝」を学習することは、教師の教育方法として考量されることを期待されているものともいえよう。これに結び付く論点は教育方法の根底の問題として「日用の学」の必要性が示唆されているのであり、それは素行の教育方法観の最たる特性である「日用」を通じて教育することに接続しているものである。後続する一連の引用は、素行の「日用の学」の契機としても重要なものと考えられるが、その例となる解釈の一つといえよう。

その点で、「孔子嘗獨立、鯉趨而過庭、曰学詩乎、對曰未也、不学詩無以言、鯉退而学詩、……」の一節は、『論語』そして『小学』「稽古」篇に示される孔子の自身の子に対する教育の逸話であるが、「詩」「礼」を学ぶ意義を説くとともに、『論語』では、孔子自身の子に對しての教育も決して特別なものでないという文脈と父親の教育としては子に距離を置き、自身の学習を促す観点が必要とされる文脈があった。しかし、『小学』そして素行の『修教要録』では、それは省略されており、朱子の解釈も「詩」「礼」の意義の解説に

終始していた。宇野精一氏は、『小学』におけるこの省略を「胎教と環境」と主眼を置く母の教えに対し、詩礼による理性的な父の教え、並びにその性格の「其の子を遠ざく」るに在ることを示すものとしてみないのである。……この引用は失当であり、……」と論じている。²⁹『修教要録』は、この指摘のように、この主題に踏み込んでいない。朱子によるところの書物による学習の意義、学習の課程が説かれているとどまるといえよう。また、ここでの父親としての教育における距離とは、学校の教師に代替されるものである。胎教論から始まる、ここでの母としての教育なるものは、素行の発達段階を考量した教育説として発展する方向であつた。しかし、いずれにせよ、この箇所には、教育方法観の在り方を触発する重要なきっかけが潜在していたことが了解される。『修教要録』期の子どもの教育方法への関心が、分化して、『武教小学』から『山鹿語類』で父子関係に焦点化する一方、内容的には、胎教論からの文脈が子どもの発達への関心という素行において発展展開した経緯と符合する問題といえよう。³⁰

『修教要録』「通じて子弟を教ふ」は、逸話を挙げる中で、教育・学問の在り方を示唆する形式がとられている。同様の形式は後年の『山鹿語類』にも採られており、前段に論旨を述べ後段に類例を示す形式である。類例自体は古典説においては特殊な例を引くものではなく、典型としての事例を集成している印象がある。この中で例えば、『小学』における馬援による人間形成上の範すなわち発達モデルに関する見解も挙げられている。「伯高に倣ひて得ざれば、猶

は謹敎の士と為らん、……季良に倣つて得ざれば、陷つて天下の軽薄子と為らん、……」³¹とある趣旨は、子弟にどのような人物をモデルとして考えるべきかと提示する説話である。同じく『小学』より「夫れ学は須らく静なるべきなり。才は須らく学ぶべきなり。学に非ずんば以て才を廣むることなく、静に非ずんば以て学を成すことなし。」³²とされる、学問には心の平静が必要な条件であることを述べたものである。丹念に素行は、こうした説話を集成するという形式を踏襲している。

こうした類例の中でまた、柳玼の子弟への戒めの書にある①他人の言を聴くこと、②儒学の古典を謙虚に学び、当世についての意見のみを声高に述べ、また学ある者を嫉むことなどがないようにすること、③自分に優る者を嫌い、戯談、追従を好み、善を喜ばず、むしろ悪を取り上げ、古典の規範「古道」に関心がないことを戒める、④遊興、酒に浸り、逆に勤勉さを笑い俗流とみなすことを戒める点を取り上げている。³³いずれも素行は、この趣旨をここですとしているのであつて、この見解を土台とするのが、素行の教育論の当期の起点ということになる。

また、教師の教育方法として関係する説述をみると、

程明道曰く、子弟の軽俊たる者を憂へば、只だ教ふるに経学念書を以てして、文字を作らしむることを得ざれ。子弟凡百の玩好皆志を奪ふ。書札に至りては儒者の事に於て最も近し。然れども一向に好著すれば亦自ら志を喪はんと。³⁴

と、ある。子弟の才気走り軽々しい者が懸念される場合、教師は、

専ら経書の学習、古典の音読だけをさせることとし、文章を作らせなくてはならない。文章は益々軽俊にさせる恐れが多いからである。子弟の一切の趣味は、勉学の志を失わせるものである。手紙の書き方の稽古などは、儒者の仕事に近いようだが、それをひたすら好むようでは学問の本筋を失ってしまうとする見解を引いている。

以下、冒頭にもみられるように制度論も混じるものの、基本的には、家庭教育に連接する随年教法としての教育課程論の延長にあることが、言説の端々にみられる。

そして、その解釈とは、

又曰はく、古人子を生みて能く食ひ能く言へば、而ち之れに教ふ。大学の法は豫を以て先と為す。人の幼なるや知思未だ主る所あらず。便ち當に格言至論を以て日に前に陳ぶべし。未だ曉知せずと雖も、且つ當に薰聒して耳に盈ち腹に充て、久しうして自ら安習すべし。若し之れを固有すれば、他言を以て之れを惑はすと雖も入る能はざるなり。若し之れを為すこと豫めせざれば、稍や長ずるに及びては私意偏好内に生じ、衆口辯外に鑠す。其の純完を欲すとも得べからざるなり。³⁵

と、あるような「豫」の解釈に関わるものである。『修教要録』「子を教ふ」が発達段階への関心を土台に既にあることをみたが、丘濬そして朱熹の「豫に」の解釈を「此の時に當つて開導するときは順にして易し」³⁶とする「節」に応じた教育方法、レディネスを想定した教育方法の方向として採るものである。

さらに教育方法の例として、

程伊川曰はく、人を教ふるに未だ意趣を見ざれば必ず学を樂しまじ。且く之れに歌舞を教へんと欲す。古詩三百篇の如きは皆古人之れを作れり。關雎の類の如きは家を正すの始なり。故に之れを郷人に用ひ、邦国に用ひ、日に人をして之れを聞かしむ。此れ等の詩は其の言簡奥にして、今の人は未だ曉り易からじ。別に詩を作り、略ぼ童子に教ふる灑掃應對、長に事ふるの節を言ひ、朝夕之れを歌はしめんと欲す。常に助けあるべきに似たりと。³⁷

と、載せている。これに、

朱子曰はく、嘗て疑ふ、曲禮の「衣撥ぐるなかれ、足蹶くなかれ」、「將に堂に上らんとするときは聲必ず揚げよ」、「將に戸に入らんとするときは視必ず下にせよ」等は、皆是れ古人小兒に歌ふの語なり。³⁸

として例を挙げているが、朱熹の『大学章句』での解釈だが、韻を踏んでいることから、子ども用に工夫された教材としての意味があるものと考えられたのである。素行は、子ども・初学者のための教材工夫に及ぶが、そうした教育的関心の起点の一つとして、本説の引用は重要な意味を持っているとみられる。教育論形成過程の問題に直接するところである。³⁹

かくみてきたが、引用の構成自体によるその意図を考えておきたい。一見脈絡なくランダムに教育諸説を引用しているかにみえて、後に続く『武教小学』『山鹿語類』『謫居童問』に素行独自の教育論として発展した論と改めて比較すると、その発想の起点と推察される多くの言説が目に残る。古典解釈の常道であるという以上に、

素行の論の特性に直接関与してゆく幾点かに注目してみた。これらは基底として共通する考え方という面でもある。

(三) 教育課程論に関する分析

『修教要録』執筆時点で、素行自身の教育方法論の直接的な記述は少なく、引用説の集積の体裁ではありながら、子どもへの教育という関心は、「胎教」説、年齢段階、また発達に即しての家庭教育、学校教育の必要性和教師による教育方法論へと明確な意図をもつて構成されていることが確かめられた。「子を教ふ」「通じて子弟を教ふ」は、子どもの随年教法から始められ、教育課程論として意図的に結ばれている。それは、『修教要録』編纂に及ぼした丘濬の『大学衍義補』の教育的意図を受けたものとみえる。⁴⁰

改めて素行の教育課程論関連の引用とその展開に注目してみる。

『修教要録』「子を教ふ」は、『礼記』「内則」による教育課程論から始められている。⁴¹この形式と意図は、『小学』の最初「立教」編にとりあげられている意義も含むものであろう。⁴²『修教要録』における教育課程論では、『礼記』「内則」から始め、他の説述の後、『文公家禮』の教育課程論で締め括っている。⁴³これに加えて、『修教要録』「通じて子弟を教ふ」では、『礼記』「曲禮」の「人生れて十年を幼」から始めて百歳までの生涯の節目を記す説、⁴⁴前述の「古人子を生みて能く食ひ能く言へば而ち之れに教ふ」以下の「豫」の解釈⁴⁵に関わる記述など、随年教法としての教育課程論に直接・間接する

説が意図的に引かれている。同様、「王制に、凡そ世子及び学士に学ふるに必ず時にす。春夏は干戈を学へ、秋冬は羽籥を学ふ、皆東序に於てす。」⁴⁶なども、教育課程を趣旨としてしているとみることが可能である。

また、『修教要録』「学問」篇「総論」の中でも、『小学』「嘉言」篇の次の説を引いている。ここでも教育課程の必要性を論じている。

大抵後生学を為さんには、先づ須らく学を為す所以の者何事ぞと理会すべし。……学業は須らく是れ厳に課程を立つべし。一日も放慢すべからず。毎日須らく一般の経書・一般の子書を読むべし、須らく多くすべからず。只だ精熟せしめんことを要せよ。須らく静室に危坐して読取すること二三百遍すべし、字々句句々須らく分明たらんことを要すべし。又毎日須らく前の三五の授を連ねて通読すること五七十遍すべし、須らく誦を成さしむべし、一字も放過すべからず。史書は毎日須らく一卷或は半巻以上を読取すべし。……須らく是れ人に従つて授読し、疑難の處は便ち質問すべし。古の聖賢の用心を求めて、力を竭して之れに従へ。⁴⁷

このように、『修教要録』においては、引用の集成でありながら、教育課程論への関心が深くみえる。本引用のように学校での教育課程として位置付けられる説とともに、学校制度の文脈に準えて教育課程の大枠が想定される説もあり、そして総合的に家庭も含めた教育課程論もある。

拙稿では、朱子学期の『修教要録』の教育課程論が古学期の『山鹿語類』の教育課程論を導き出したと評価しており、『礼記』「内則」

を起点としながら、朱熹の『文公家禮』の教育課程論を取り上げることで、年齢と読書を基準とした教育課程を示しながら、これを踏まえた上で、古学期の『山鹿語類』の教育課程論の主張において、教育課程では、年齢よりも子ども発達の状況を優先し、読書を固定的な基準とするのではなく、子どもの陶冶全体にわたる教育課程を考量することを説く論となっていることをみ、尚かつ、『適居童問』の教育課程論は、より子どもの生理的な発達に着目した論へと発展を遂げていると論証した。また、こうした生理的な発達に着目した卓見も、遑れば、『大学衍義補』の中に示唆される要素ではなかったかと論証した。⁴⁸

『修教要録』の集成された教育課程論は、記述としては系統性を欠くかにみえるが、素行の教育論の起点として重要である。発達段階への着目、生涯の若年期へ集約された教育的関心、胎教から始まり幼児教育からの教育時期への発達の視点を入れた高い関心、女子教育、そして丘濬の強調する教育的着眼点すなわち「時に當つて之を開導するときは順にして易し。此の時を過ぎて之を防閑するときは逆にして難し。」とする発達の「節」を踏まえた観点を伴った教育課程論に依拠していることであり、後の『山鹿語類』『適居童問』への萌芽が認められる点である。

『武教小学』『子孫教戒』では、教育課程論については少しく意義として述べられる程度である。『修教要録』との関係では、そこに載せられた張横渠の幼児から厳格な教育を要するとの趣旨の解釈が、ここに関わることを指摘したが、⁵⁰『武教小学』でも、「凡そ幼稚

の間は、凡そ幼程の間は、気の稟くる所唯だ天然にして、心知未だ主とする所あらず。其の習日々に長じ月々に益して、善惡の機す所たり。甚だ慎むべし。張横渠の曰はく、今世は男女幼きよりして便ち驕情壞了す。長ずるに到りて益々凶狼なりと。」とつながり、「子を愛して教へざるを驕子と曰ふ。士の子孫を警戒すること、其の知を正しくし、……」と続く。「曲禮」の「幼子は常に視て誨すこと勿れ」があり、「故に知の発するに於て邪正を考へ……」の論へ続く。『小学』『立教』で「内則」説に連続して記されていることも理由であろう。⁵¹その点では、女子教育が続いて展開される動機も、あるいは『小学』の記述の形式に対応したところもあったのではなからうか。『武教小学』が編纂にあたり、『小学』を意識したことは明記されている。⁵²「教ふるに文学を以てす。」としながら記誦の学を避け、「和俗」への適合を説くのである。女子教育については、「和俗」への適合を意識したものであり、『源氏物語』『伊勢物語』批判が出てくるのも、「和俗」への適合を意識するがゆえである。⁵³

『山鹿語類』では、前述のように、構成の違いがあり、「父子道」「父の身を慎む」説に位置付けられ、父子関係において「慈の自然に止まる時は、其の間に警戒自然にそなはるべし。」「何事をも切諫しきびしく戒むる時は、父子の間必ず隔心出来て……」⁵⁴との観点を提起しつつ、養育としての発達を意識した教育課程論が、「教戒に節あり」と同様の趣旨で別項でも述べられる。⁵⁵「教戒に節あり」の教育課程論は、『山鹿語類』の教育課程論の特性を表した代表的なものであるが、冒頭に『礼記』『内則』と『文公家禮』を挙げ、「王

制」の前記した教育課程説を古例として拾っている。⁵⁶『修教要録』との関係が明白なところである。素行の自論の中にも、実は古例が混在した記述がみられるものの、年齢と読書を基準とせず、発達段階を観察し、「節を詳にして」、「平生の言行即ち事物の法則たらしむべき」教育方法を基準とするところが、素行の本説の最大の特徴であった。⁵⁷

『謫居童問』の教育課程論は、学校の教師論と教育課程論が家庭教育論としての教育課程論とは別項に明記してある点である。構成的にも、教育課程論と教師論が近くに書かれている。内容は、「小学の師・大学の師」論であり、⁵⁸そこでも「文学読書」を基準としないう趣旨を説いていた。⁵⁹「五行」説から展開した素行の人体の生理的な発達への観察に着目した教育課程論が特色であった。⁶⁰

(結)

『修教要録』の教育説は素行の思想変遷において朱子学期（思想的動揺期）にあたり引用の集積の体裁でありながら、その後の素行の古学期の教育論の基盤も明示され深い関係性を看過出来ない。既にその著作には、古学へ向かう胎動や模索が部分的にみられ、明暦二年（一六五六年）の素行の一連の著作へ展開する。冒頭の『修教要録』以降、その時期は、朱子学中心にすることを意思表示する一方、同年中の『武教小学』に明示される「和俗」としての日本への適用、武士の職能としての観点に立つ展開がある。その要素として

は、教化政策としての学校論と教師論、また学習論とも素材として重要であった。特に、「子を教ふ」という関心から学校に言及し、そこでの教育方法の関心に進んでいる。一方、胎教から始まる教育方法の展開発展を形成したところは大きな特性であった。

本稿では、以下の点を中心に明らかにした。①『修教要録』「通じて子弟を教ふ」では家庭教育以降（併行含む）の学校教育説を位置付け集成しているが、古学期『山鹿語類』では「父子道」篇の家庭教育論としての学校は分化して教化政策の領域に移行して扱われている。学齢の問題は、『修教要録』はもちろん、あるいは『武教小学』『山鹿語類』にあっても古例の一端として紹介されているが、その意義を汲んで日本の実情や武士の職能の観点で勘案することが主眼であり、この論旨は教育方法論全体に共通している。②生涯にわたる教育課程論があり、その中での若年層の教育への関心と具体的な方法案に焦点化した教育課程論が特性となる。③同時に、実情への対応案とは、「日用の学」を推奨する方向でもあった。

さらに、④その学校の教師と教育方法に関しては、(1)教師に対する礼法がみられ（同時に教師の方法）、(2)威儀をもって教師に接する面が『武教小学』に続く。(3)陶冶性を土台に教育方法を説く面の直接性が後年への形成過程の中で強くなってゆく傾向がある一方、資質・能力別の方法観が初期にはあった。(4)『小学』解釈の問題も含んで、『修教要録』期の子どもの教育方法への関心が、分化して、『武教小学』から『山鹿語類』で父子関係に焦点化する一方、内容的には、胎教論からの文脈が発達・養育への関心へと素行において

発展展開した経緯がある。(5)教育課程論の特性は、「豫」の解釈にあり、「節」に応じた教育方法へ発展させた。(6)子ども・初学者のための教材工夫、等を含み、『修教要録』に起点がみられた。

そして、⑤教育課程論は、『修教要録』に、後の発案の起点となる要素が多く潜在していた。それでも、「日用の学」の観点をより明確にしながら展開することを基礎として、『武教小学』、そして『山鹿語類』、『謫居童問』へと発展展開したのだが、ここでは、特に家庭教育論の延長にある教育課程論と学校教育論の教育課程論の構成・位置づけの変化に着目したい。

また、『修教要録』の教育説の集成としての特性から、未分化になっていた問題を、『武教小学』、『武教本論』、そして『山鹿語類』さらに『謫居童問』へと、日本の実情に対応する教育論を勘案することを中心に、個々の領域について、分化した形で案出した制度・方法論が形成されてゆく過程を跡付けることができた。同時に、基底として共通する考え方の面を確認することもできた。

(註)

- 1 拙稿「山鹿素行の教育論形成過程に関する考察—『修教要録』における陶冶性論並びに学校・教師・学習論を中心に—」(工学院大学研究論叢五二—二二二号)二〇一五年二月・五〇—六三頁、同「山鹿素行の教育論形成過程における「教育方法」の考察—『修教要録』における教育方法論・教育課程論・学校論を中心に—」(工学院大学研究論叢五三—二二二号)二〇一六年三月・九〇—一〇三頁参照。ここで、『修教要録』から『謫居童問』への教育論の展開として考察する前提になっている時期と特性を簡単に

記すと、四教一致期、朱子学期(思想的動揺期)、古学期への思想変遷において、その朱子学期の『修教要録』、『武教小学』、『武教本論』、古学期の『山鹿語類』、『謫居童問』の時系列になるが、教育論としては、『修教要録』以降、半年後の『武教小学』、『武教本論』で変化をみせ、古学期の『山鹿語類』で大きく変化、『謫居童問』でさらに変化している。

2 「山鹿素行の教育論形成過程における「教育方法」の考察—『修教要録』における教育方法論・教育課程論・学校論を中心に—」(前掲)参照。拙著『教育思想の研究—山鹿素行の教育論の考察を中心に—』(酒井書店・二〇一三年十二月)一三五—一四七頁参照。

3 修教要録・広瀬豊編『山鹿素行全集思想篇』(岩波書店・一九四〇—一九四二年)三卷・二六七—八頁。

4 山鹿語類・『山鹿素行全集思想篇』(前掲)六卷・二九二頁。

5 同前六卷・二九二頁。

6 同前六卷・二八八—二八九頁。

7 同前六卷・二九二頁。

8 同前六卷・二九二頁。

9 謫居童問・『山鹿素行全集思想篇』(前掲)十二卷・二七—二八頁。

10 武教小学・『山鹿素行全集思想篇』(前掲)一卷・四九六頁。

11 武教本論・『山鹿素行全集思想篇』(前掲)一卷・五二六頁。

12 修教要録・(前掲)三卷・二六八頁。

13 同前三卷・二六八頁。

14 同前三卷・二六八—二六九頁。

15 同前三卷・二七九頁。

16 謫居童問・(前掲)十二卷・二八頁。

17 拙稿「山鹿素行の教育論形成過程に関する考察—『修教要録』における陶冶性論並びに学校・教師・学習論を中心に—」(前掲)参照。

18 修教要録・(前掲)三卷・二七一頁。

19 同前三卷・二七一頁。

20 同前三卷・二七一—二七二頁。

21 武教小学・(前掲)一卷・四九六頁。

22 同前一卷・四九六頁。

23 修教要録・同前三卷・二六四頁。

24 修教要録・(前掲)三卷・二八一—二八二頁。小学・宇野精一『小学』(新釈漢文大系)明治書院・一九六五年・二四三—二四五頁参照。武教小学・(前掲)一卷・四九六頁。

- 25 修教要録・(前掲) 三卷・二八〇～二八一頁。小学・『小学』(前掲) 二四三～二四五頁参照。
- 26 『教育思想の研究—山鹿素行の教育論の考察を中心に—』(前掲) 六九～一七四頁参照。
- 27 修教要録・(前掲) 三卷・二七二頁。
- 28 同前三卷・二七三頁。
- 29 小学・『小学』(新釈漢文大系)(前掲) 一八〇八頁。
- 30 拙稿「山鹿素行の教育論形成過程における『教育方法』の考察—『修教要録』における教育方法論・教育課程論・学校論を中心に—」(前掲) 参照。
- 31 修教要録・(前掲) 三卷・二七四頁。小学・『小学』(前掲) 二四六～二四八頁参照。
- 32 修教要録・(前掲) 三卷・二七五頁。小学・『小学』(前掲) 二五〇頁参照。
- 33 修教要録・(前掲) 三卷・二七五～二七六頁。小学・『小学』(前掲) 二五一～二五三頁参照。
- 34 修教要録・(前掲) 三卷・二七八～二七九頁。小学・『小学』(前掲) 二四一～二四二頁参照。
- 35 修教要録・(前掲) 三卷・二七九～二八〇頁。
- 36 同前三卷・二六七頁。
- 37 同前三卷・二八〇頁。小学・『小学』(前掲) 二四二頁参照。
- 38 修教要録・(前掲) 三卷・二八〇頁。
- 39 同前三卷・二八〇頁。
- 40 拙稿「山鹿素行の教育論形成過程における『教育方法』の考察—『修教要録』における教育方法論・教育課程論・学校論を中心に—」(前掲) 参照。素行の発達段階を踏まえた教育方法への関心、教育課程論の変遷・展開については、拙著『教育思想の研究—山鹿素行の教育論の考察を中心に—』(酒井書店・二〇一三年十二月) 一四〇～一四五頁参照。
- 41 修教要録・(前掲) 三卷・二六二頁。
- 42 小学・『小学』(前掲) 一八～二三頁。
- 43 修教要録・(前掲) 三卷・二六五～二六六頁。
- 44 同前三卷・二七〇頁。
- 45 同前三卷・二七九～二八〇頁。同前三卷・二六七頁。
- 46 同前三卷・二六九頁。
- 47 同前三卷・四九二～四九三頁。小学・『小学』(前掲) 三五六頁。
- 48 拙著『教育思想の研究—山鹿素行の教育論の考察を中心に—』(前掲) 一四〇～一四五七頁。
- 49 修教要録・(前掲) 三卷・二六七頁。
- 50 拙稿「山鹿素行の教育論形成過程に関する考察—『修教要録』における陶治性論並びに学校・教師・学習論を中心に—」(前掲) 参照。
- 51 武教小学・(前掲) 一卷・四九五～四九六頁。小学・『小学』(前掲) 二四頁。「人に気稟の異あり、故に其の軽重清濁を考へて習ひ馴らさしむ」と、『山鹿語類』の論への展開が読み取れる箇所も多い(武教小学・(前掲) 一卷・四九六頁)。
- 52 武教小学・(前掲) 一卷・四八一頁。
- 53 同前一卷・四九六～四九七頁。
- 54 山鹿語類・(前掲) 六卷・二七一頁、二七三頁。
- 55 同前六卷・二七四～二七五頁。
- 56 同前六卷・二七八～二八九頁。
- 57 同前六卷・二八九～二九二頁。
- 58 謫居童問・(前掲) 十二卷・三三～三九頁。拙著『教育思想の研究—山鹿素行の教育論の考察を中心に—』(前掲) 二一四～二一九頁参照。
- 59 謫居童問・(前掲) 十二卷・二四頁。
- 60 同前十二卷・二六～二九頁。